

星と燕

作・入江おろば

神宮 そら 熱烈なヤクルト党、つばめ女子。

横浜 大洋 そらの彼氏。

古田 隆寛 そらの元カレ。

関根 潤子 そらの元カノ。

八重樫 九郎 そらの元上司。

5人並んだ席。客席と同方向に向いている。

試合前球場の環境音。ここは神宮球場。

つばみのユニホームを着た、そらがスマホで座席番号を見ながら客席を通って入ってくる。

そら 「えーと、18段の173番……ここは……20段か……あ、すみません。

もうちよつと前……お、18段。171、172……うん、ここだ」

5人席の真ん中に着いたそら。気合を入れる。

そら M 「よし、今日は大洋さんと5回目のデート。前回のデートで指輪のサイズを聞かれたし、もしかして……もしかしちやったりして。勝負デートはもちろん、私の愛するこの場所、神宮球場。そう、私、神宮そらは、今日はじめてカレに、つばめ女子であることをカミングアウトするのだ……！」

ガッツポーズをするそら。その目線が何かを気付く。

そら 「あっ！」

古田 「えっ!?!」

視線の先には古田がいる。そら、気まずそうに視線をそらす。

古田、スマホを見ながら、おずおずと近づき、隣の174に荷物を置く。「あちゃー」の仕草のそら。

古田「…ひさしぶり」

そら「う、うん。ひさしぶり」

古田「元気だった？」

そら「うん、隆寛も元気そう」

古田「…まだ、隆寛って呼んでくれるんだ」

そら「え…まあ、隆寛は隆寛なので」

古田「そらもそらのままだ。…そう、そらそーだ。そらそーら。なんつって」

寒いダジャレに一人で笑いだす古田。

そらM「…でた。なんでこの男を好きになったんだろ、学生時代の自分に小一時間説教をしてやりたい。おまえは今すぐつば九郎先生のもつで、笑いのなんたるかを勉強してこい」

古田「ん、なんか言った？」

そら「あ、いや、全然。ね、そこ（の席）ホントあってる？」

古田「うん」

そら「ほんと？ほんとに？」

古田「間違いないとうギャオス（爆笑しながら座る）」

そら「（溜息）」

八重樫「そら」

そら「はい？…え、ああっ！」

八重樫「どしたんだおまえ。いやそうか、つばめ女子だったもんな」

そら「課長…」

八重樫「何度かここにも来たな。ほら、覚えてるか、ひどい夕立にあった時、おまえ着替えに」

そら「あー、っと、課長、いや八重樫元課長、お久しぶりです。お変わりないようで」

八重樫「変わったよ。会社辞めた後、妻とも別れて、友達と事業を立ち上げたんだ。それで」

そら「それは大変。大変でしたね。ところでお席は？」

八重樫「席？ ああ、ここだ」

171に荷物を置く。「あちゃー」の仕草のそら。

八重樫「こんな偶然もあるもんなんだな(座る)」

そら「ですねー」

引きつり笑いのそら。

そら「なんてこつたい。隣に元彼、一つ先にはいろいろあった元上司……」

潤子「すみません」

そら「今度はなに？」

潤子「175番ってこのあたり……そら！」

そら「あ、あ、あ……」

席に崩れ落ちるそら。

古田「そら？」

八重樫「おい大丈夫か？」

心配した二人が、そらを起こそうとすると、

潤子「触らないで！」

古田八重樫「え？」

潤子「男、そらに触らないで、男！」

「シツシツ！」と威嚇すると抱きかかえるように、そらを守る潤子。

古田八重樫「……(顔を見合わせて座る)」

潤子「大丈夫、そら？こわかったね」

そら「潤子さん……」

潤子「私がいるからもう平気。かわいい顔が台無しよ」

ふらふらと立ち上がるそら。

そら「大丈夫です、ちよつと……キヤパを余裕で超えてきちやって」

潤子「なにが？」

そら「想定外が。あ、潤子さん、席は？」

潤子「175番。ここね（席に座る）」
そら「ですよね……」

警報音が鳴り、ファールボールをよける八重樫たち。
「打球の行方にはじゅうぶんご注意ください」

そらM「潤子さんと初めて会ったのもここだ。彼女は当時ビールの売り子をしてた。そのルックスでおじさんたちからは大人気。会社を辞めたストレスから毎日のように観戦していた私は、ヤクルトが劇的なサヨナラ勝ちをした日、彼女にナンパされ、しこたまビールを飲んで、気がついたら……付き合うことになってた」

その間に、座席を客席向きに反転（新幹線の座席みたいに回転）。
3人を見つめるそら。

そら「みんなヤクルトファンじゃん。そうか、ほとんど神宮球場、ヤクルトの関係で知り合った人とはばかり、私はこれまで付き合ってきたのだ。交友関係が狭いと、こんな、こんな——…」

潤子「そら、ビールでも飲もうよ」
古田「そらはエビスだよな」
八重樫「そらの分は俺が出すよ」
潤子「なんでよ」

揉め出す3人。

そら「こんな怖ろしい弊害が……ああ、自分の馬鹿さ加減を思い知った。野球の神様、神宮そらは愚かな女でした」

アドリブで揉めてる3人の間に入って、座るそら。
走って来る大洋。

そら「はーあ（深い溜息）」
大洋「そら！ ごめんごめん、着替え取りに帰ったら遅れちゃって」

横浜のユニフォームを来た、どう見てもベイファンの大洋。
固まる4人。172番に座ってタオルを掲げる大洋。

大洋「よっしゃあ、今日は勝つぞお」

大洋、バイスターズの球団歌『熱き星たちよ』のサビを歌いだす。

4人「え？」

そら「んーレッツゴー、じゃなくて。大洋くん大洋くん、横浜ファンだったの？」

大洋「あれ、言ってなかったっけ？」

そら「(早口) イッテナイッテイッテナイ」

古田「なんて？」

そら「あまりの事に口が回らなくて」

大洋「へえー、そらって、つばめ女子だったんだね。一塁側はじめてだなあ。

まあセリーグの弱小球団同士、仲良く応援しよう」

間

潤子八重樫古田「はあーっ!？」

潤子「ちよっと待ってよ」

八重樫「弱小？」

古田「球団？」

潤子「同士？」

八重樫「うちは3年前に日本一」

古田「一昨年(おとし)はセリーグ優勝」

潤子「2位の横浜と8ゲーム差をつけたぶっちぎり。漢字で書いたら仏(ほと

け)に恥(はじ)に義理人情で仏恥義理!」

八重樫古田「仏恥義理!」

潤子「夜露死苦!」(などアドリブ)

八重樫古田「夜露死苦!」

大洋「でも去年は」

3人、急に知らんぷり。

古田「ショートの大岡、今年は安定感ありますよね」

八重樫「そう、君わかっているね」

潤子「うまいし、打つし、かわいいし、ホント言う事ないよね」

3人「ねー」

大洋「でも、今年は」

八重樫「オスナ、サンタナも残留確定したし」

古田「村上の復調が大きいですよ。ダウンスイングで肩が開かなくなりました」

潤子「来年が楽しみ楽しみ」

フラフラと立ち上がるそら。

座席を壁向きに反転する4人。

そらM「まさか、こんなことになるなんて。学生時代の元カレ、いろいろあつて辞めた前の会社の元上司、無職時代に出会った元カノ、そして大洋くんは横浜ファン。そんなあ……」

そら、回り込んで席に落ちるように座る。

球場の環境音が大きくなる。

SEカキーン！みんな首を左から右へ。

大洋「よっしゃ、ナイスバッティング京田！」

古田「京田が強打を飛ばすのは今日だ！」

そら「つまんなー」

潤子「(笑って)なにそれ、マジうけるんですけど」

そら「え？」

八重樫「いいセンスしてるじゃないか」

大洋「ほんとですね、京田だけに」

4人で笑い合う。そらは立ち上がって4人を観察。

古田「そういえばお姉さんって、もしかしてビールの」

八重樫「あ、どっかで見たことあると思ったら、伝説のエビスビールの売り子

さんだ！」

潤子「関根潤子っていいいます。伝説なんて……もう引退して何年もたってますし」

古田「いえいえ神宮のレジェンドですよ。僕、古田隆寛です。良かったら「E」を」

そらM「は？ナンパ？むりむり、潤子さんは根っからの百合女子だから」

潤子「いいですか？ぜひ交換しましょ」

そらM「えっ？…転向したの？二刀流？」

スマホをかざし合う潤子と古田。

八重樫「んーおじさんも入っちゃおうかなー」

そらM「やめてくれー。悪夢だ。これは三日前、駆け込み乗車をして運転手さんと乗客の皆さんに迷惑をかけた罰だ。そうだ、きつとそうだ。すみません神様、もう二度と駆け込み乗車はしません。この悪夢から目覚めさせてください」

八重樫、潤子、古田がそらの心象ではスローモーションになって踊りながら回る。

八重樫「やっーたー、おーじーさーんーうーれーしーいー」

古田「やーくーるーとーグーループ」

潤子「つーくーりーまーしよー」

そら「やめて、もうやめてー」

大洋「そら」

スローモーション3人が止まる。

大洋「そら大丈夫？」

そら「大洋くん…」

大洋「気分悪いなら帰ろうか？送っていくよ」

そらM「…：そうだ、大洋くんはいつも私のことを気にかけてくれる」

八重樫、潤子、古田は座る。

大洋はユニフォームを脱いで回想に入る。

大洋「(名刺を差し出して)はじめまして、ローズ食品の横浜大洋といたします。こちらのスーパ-を担当させて頂くことになりました。宜しくお願い致します」

その間、そらはユニフォームを脱いで席に置く。
エプロンをつける。

そら「仕入れ担当の神宮そらです。屋敷さんたちの後任の方？」

大洋「はい、屋敷と加藤、高木が異動になりました」

そら「そうなんです。よろしくお願いします」

大洋「僕にできることがありますたら、なんでも言ってください」

爽やかに笑う大洋。

そらM「前の3人は、新商品の陳列や特売のアイデアを持ち込むけど、面倒く

さいことは私にやらせて、とにかく逃げ足がはやい人たちだった」

大洋「試供品のポップ、作ってきました、どうですか？」

自作のポップを渡す大洋。

古田と八重樫が席をセッティングして（時間経過）座る二人。

そら「笑って）へえ、そんなことがあったんですね」

大洋「あの3人は社内でもスーパーカートリオって呼ばれてまして。終業時間

より前からリードして、5時ぴったりににはもう影も形もない」

そら「足、はやっ」

大洋「神宮さん、本当に申し訳ありませんでした」

そら「いえいえ……でも、ちょっとだけローズ食品さんは苦手でした。いい商

品が多いのに。だから良かった、横浜さんが来てくれて」

大洋「……………」

そら「それじゃ私は売り場に」

大洋「あの」

そら「はい？」

大洋「神宮さんのこと、そらさんって、呼んでいいですか？」

見つめ合う二人。

SE雨が降って来る。潤子がヤクルト傘を差して通り過ぎる。

そら、雨の中を飛び出す。

大洋が傘を貰って走って来る。

大洋「そらさん、待って！」

そら「ほっといてください。もうあの店長信じられません。私、やめます」

大洋「今ならまだ間に合います。謝って、ちゃんと話を聞いて」

そら「いつもいつも小言と注意ばかり。あの人、自分は完璧だと思ってるんです」

大洋「じゃあ、いつも褒めてくれる人を信じられますか？」

そら「…え？」

大洋「僕は、褒めるだけの人はただ通り過ぎていくだけの人だと思っています。自分のことを本気で注意してくれる、叱ってくれる人が、本当の味方なんじゃないですか？」

そら「……………」

大洋「自分は完璧じゃないから、これまでいっぱいミスや間違いをしてきたから、その人の成長のために注意するんです。野村店長はそらさんのことを高く評価しています。それは、二人をそばで見ているとよくわかります」

そら「…大洋くん」

大洋、そらに傘を差しかけて二人で戻って行く。ユニフォームに。球場の環境音。

八重樫「あー、いまの手えだしたらダメだ。しかし、東は打てないな。昔でいうと野村弘樹だな」

古田「背、小っちゃいんですけどね。石川みたいになりそう」

SEカキーン

八重樫が立ち上がる。

八重樫「よっしゃー、サンタナ、いったあ！」

潤子「ミンゴーっ！」

古田「ホームラン！」

八重樫潤子古田「(♪東京音頭前奏)」

そら「(♪東京音頭歌詞)」

八重樫M「そらは新人研修の頃から目立っていた。仕事は真面目だし、人当たりもいい。宣伝部の課長だった自分は希望して彼女を部下に取った。今思うと、それはどこかで好意があったのかも知れない。当時、奸活がうまくいかず妻との関係が悪くなっていて、俺は娘のようにそらを可愛がった。同じヤクルトファン、公私かまわず一緒にいた」

古田M「大学のプロ野球ファンサークルでそらと出会いました。正直、なんの取柄もない自分にはもったいない彼女でした。おそらく、僕なんかと付

き合ってくれた理由は、ヤクルトファンが僕だけだったからだと思いません。それも本当を言うと……もともと僕は西武ファンでした。彼女が応援するヤクルトを好きになったのは、彼女が好きだったからです」

八重樫 M 「周りは鼻屑に見えただろう。それが、彼女を苦しめることになるとは思ってもみなかった。それから呼び出されて、退社の意志を聞いたとき、村上にフルスイングで殴られたような衝撃を受けた。俺は、馬鹿だった……。彼女が去った後、俺も会社を辞めた。妻と別れて、自分を見つめ直して。それから、昔からの友人とネット事業を立ち上げた」

古田 M 「いつもそらを見ていました。笑って貰いたくて馬鹿なことばっか言っで。でも就活でだんだん会う時間が少なくなり、彼女は第一希望の有名メーカーから内定が出ました。うまくいってなかった僕は、それを喜ぶことができませんでした。……子供でした。それから自然消滅して……でも、今でもヤクルトは大好きです」

潤子 M 「そらが本気で私を愛してないことは最初からわかっていた。あの時、何かから逃げようとしていたことも。自分もそんな時期があったから。それでも良かった。たとえ、いつときでも、そらの避難所になれるなら」
10

八重樫 M 「がむしゃらに仕事して人に頭を下げまくった。気付いたら事業が当たり前。いまじゃITベンチャー企業のCEOだ。ほんとに……人生は何が起こるかわからない」

古田 M 「だからこの場所、神宮球場は、僕にとって永遠の青春なのです」

潤子 M 「後悔も嫉妬の念もない。ただ、彼女の幸せを心から願っているから」

ハイタッチするそらと大洋。

そら 「あ、横浜ファンなのに……ごめんはしゃいじやって」

大洋 「そら」

そら 「え？」

大洋 「貰って欲しい物があるんだ」

大洋、指輪の箱を取り出して差し出す。

片膝をついて差し出す。

そら「ちよ、やめてよ！ みんなの前で！」

3人ジッと見つめている。そらが見るとプイッと知らんぷりする。球場の環境音が大きくなる。大洋は顔を落として目を閉じる。

そらM「ええ、どうしよう、どうしよう。大洋くんは優しくて、いつも私に明かるさをくれる人だ。暗闇にいる時、じんわりと照らしてくれる星のように。そう、彼は星、スターだ。燕は夏の時期だけ日本で過ごす渡り鳥。フィリピンやベトナムまで何週間もかけて渡って行く。ハクチョウやカモのように群れを組まず、単独で夜間飛行をする時、星の位置を頼りに目的地を指すって聞いたことがある。燕の孤独な旅路に明かりと進路を教えてくれるのは星だ。私にとっての人生の道しるべになる星。行く先を導いてくれる星。彼と生きてみよう。大洋くんは、私にとって運命（さだめ）の星なんだ」

大洋、目を開ける。

大洋「そらさん、結婚してください」

SEカキーン

環境音が消える。

指輪を受け取るそら、微笑む。

万感の想いで見つめる八重樫、古田、潤子。

実況の声「村上打った、大きい、大きいーホームラン！！」

5人で神宮の空を見上げる。

おわり